

### 第3章 通信制高校に学ぶ生徒の現状と課題



## 第1節 「学校基本調査」に見る通信制高等学校の生徒の状況

### 1-1 通信制高等学校に在籍する生徒の数と年齢構成の変化

すでに述べたような私立を中心として近年の通信制高校が増加している。それは構造改革特区認定を受けた地域に設置された学校設置会社立の高校の増加や技能連携校が通信制高校へとになっていったことが主要因となっているようである。それにともない、全日制・定時制の高校に在籍する生徒の数が減少傾向にある一方で、通信制高校に在籍する生徒の数は、下表1-2-2のように、2004年度以降上昇傾向が見られる。ただし、設置者別に見ると、公立高校在籍者は減少し、私立高校在籍者がそれ以上に増加しているのが実状である。

【表1-2-2】2003年度以降の通信制高校の在籍者数の推移（設置者別）〔再掲〕

設置者別 年度	公立	私立	合計
2003	105,490	84,616	190,106
2004	96,774	85,011	181,785
2005	93,770	89,748	183,518
2006	91,361	91,156	182,517
2007	89,973	92,622	182,595
2008	88,384	94,895	183,279
2009	88,132	97,980	186,112
2010	86,843	100,695	187,538

〔出典〕 e-Statに掲載されている各年度版の「学校基本調査」を基に作成した。

また近年、通信制高校生が若年化していることについてもすでに確認したところである。通信制高校の生徒の平均年齢が17歳程度であることを裏付けるように、2010年度で18.7万人いる通信制高校の74%あまりを20歳未満の生徒が占めており、10歳台の生徒達を年齢別に見ても17歳が最も多く、次いで16歳、その次に15歳と19歳がほぼ同数という状況であった。15歳から17歳の生徒が経年的にも多くなっており、中学卒業後すぐに通信制高校に進学する生徒が増

えていることをうかがわせるものであった。さらに、設置者別に年齢構成を見ても、表3-1-1のように、公立高校については2003年度以降在籍生徒数が漸減していく中で、10歳台の生徒が占める割合だけが漸増し、2007年度には50%を超え、2010年度には55%にまで上昇しているのがわかる。その次に20歳台が36%となっており、30歳未満の生徒が90%あまりを占めていることがわかる。

【表3-1-1】 2003年度以降の公立通信制高校在校生の年齢構成の推移

(上段：人数 下段：割合)

年度	15～19歳	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60歳以上	合計
2003	50,993 48.3%	40,989 38.9%	7,775 7.4%	2,523 2.4%	2,095 2.0%	1,115 1.1%	105,490 100.0%
2004	48,796 50.4%	36,713 37.9%	6,676 6.9%	1,993 2.1%	1,625 1.7%	971 1.0%	96,774 100.0%
2005	46,574 49.7%	36,877 39.3%	6,495 6.9%	1,613 1.7%	1,281 1.4%	930 1.0%	93,770 100.0%
2006	45,058 49.3%	36,093 39.5%	6,641 7.3%	1,571 1.7%	1,133 1.2%	865 0.9%	91,361 100.0%
2007	45,177 50.2%	35,182 39.1%	6,359 7.1%	1,398 1.6%	1,012 1.1%	845 0.9%	89,973 100.0%
2008	46,251 52.3%	33,781 38.2%	5,356 6.1%	1,376 1.6%	793 0.9%	827 0.9%	88,384 100.0%
2009	47,505 53.9%	32,893 37.3%	4,963 5.6%	1,370 1.6%	607 0.7%	794 0.9%	88,132 100.0%
2010	48,009 55.3%	31,490 36.3%	4,664 5.4%	1,387 1.6%	517 0.6%	776 0.9%	86,843 100.0%

〔出典〕 e-Statに掲載されている各年度版の「学校基本調査」を基に作成した。

これに対して私立高校では、表3-1-2のように、もともと10歳台の生徒が90%前後を占めていること、2003年度以降少子化にも関わらず全体として1.6万人の生徒数増が見られることが公立高校とは対称的である。2005年度には10歳台の生徒が減少し、20歳台以上の各年齢層が実数で前年度に比べ大きく増加

しているため、10歳台の生徒が占める割合も86%に落ち込んだが、その後、生徒数は増加傾向にあり、2010年度には再び90%台を回復している。2003年度と2010年度を比較すると私立高校全体として1.6万人の生徒が増加しているが、そのうち10歳台の生徒の増加が1.3万人を占めており、この間の生徒数の増加も10歳台の生徒の増加によるものであることもわかる。また、10歳台の生徒に次いで多いのは20歳台の生徒である。2003年度以降の在籍生徒全体に占める割合では6～8%程度に留まっているが、私立高校では30歳未満の生徒が95%以

【表3-1-2】 2003年度以降の私立通信制高校在校生の年齢構成の推移

(上段：人数 下段：割合)

年度	15～19歳	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60歳以上	合計
2003	78,028 92.2%	5,464 6.5%	537 0.6%	169 0.2%	244 0.3%	174 0.2%	84,616 100.0%
2004	78,093 91.9%	5,798 6.8%	590 0.7%	134 0.2%	218 0.3%	178 0.2%	85,011 100.0%
2005	77,773 86.7%	7,228 8.1%	2,015 2.2%	1,417 1.6%	1,011 1.1%	304 0.3%	89,748 100.0%
2006	79,524 87.2%	7,376 8.1%	1,756 1.9%	1,225 1.3%	944 1.0%	331 0.4%	91,156 100.0%
2007	82,260 88.8%	6,749 7.3%	1,439 1.6%	1,013 1.1%	838 0.9%	323 0.3%	92,622 100.0%
2008	84,528 89.1%	6,625 7.0%	1,470 1.5%	1,034 1.1%	884 0.9%	354 0.4%	94,895 100.0%
2009	86,937 88.7%	6,546 6.7%	1,655 1.7%	1,317 1.3%	1,070 1.1%	455 0.5%	97,980 100.0%
2010	90,673 90.0%	6,855 6.8%	1,231 1.2%	881 0.9%	668 0.7%	387 0.4%	100,695 100.0%

【出典】 e-Statに掲載されている各年度版の「学校基本調査」を基に作成した。

上と、公立高校以上に若年化していることになる。なお、私立高校の場合、年齢層による若干の違いがあるが、20歳台以上では2005年度と2009年に生徒数

が一時的に増加している。2000 年以降、学校設置会社立を含む私立の通信制高校の設置数が多くなっており、年度毎の設置数が影響を与えているのかもしれないが、確定的なことは現時点ではわからない。

## 1-2 通信制高等学校卒業生の進路状況

【表 3-1-3】 2002 年度以降の通信制高校全体の卒業生の進路状況の推移

年度間*	大学・専修学校等の教育機関在籍者			就職者	左記以外の者	死亡・不詳の者	計
	大学等進学者(内数)	就職している者(内数)					
2002	12,170	4,663	209	7,383	17,323	2,907	39,783
2003	13,178	4,770	84	7,106	16,723	2,820	39,827
2004	13,607	5,300	49	7,315	17,949	2,167	41,038
2005	6,524	2,742	33	2,776	10,048	1,267	20,615
2006	15,018	6,351	35	6,827	17,928	1,756	41,529
2007	16,085	7,343	40	7,443	17,255	2,177	42,960
2008	17,489	8,038	29	6,695	18,415	888	43,487
2009	18,809	8,400	35	5,971	19,135	1,539	45,454

\* 当該年度の間卒業した者の進路を示しているため「年度」ではなく「年度間」としている。

【出典】 e-Statに掲載されている各年度版の「学校基本調査」を基に作成した。

ここでは通信制高校卒業生の進路状況を確認しておきたい。表 3-1-3 は、2002 年度以降の卒業生の進路状況の推移を示している。在籍生徒数の増加に連動するように卒業生の数も増加しているが、その内実は、高校卒業後も引き続き大学等の教育機関に在籍している者の数が順調に増加する一方で、就職者が減少傾向にあることがわかる。教育機関に在籍している者には、大学・短期大学や専修学校（専門課程）への進学者と専修学校（一般課程）等や公共職業能力開発施設等への入学者も含まれる。また、表には示していないが 2009 年度間に通信制高校から大学・短大へ進学した者の割合は 18.5%、専修学校（専門課程）へ進学した者の割合は 20.6%となっている。これらの数字は 2002 年度間にそれぞれ 11.7%、16.0%であったのに比べれば増加傾向にあるが、ほぼ同時期（2001 年度末）に全日制・定時制高校から大学・短大へ進学した者の割合が 54.3%、専修学校（専門課程）へ進学した者の割合が 15.9%となっている。単

純な比較はできないものの、大学等進学率についていえば、通信制高校のそれは全日制・定時制高校に比較して低い数字に留まっている。

なお、卒業生の進路状況で気になるのが、教育機関に在籍するのでもなく、就職するのでもない者（表中では、「左記以外の者」と表記）の割合が2009年度間で42.1%、「死亡・不詳の者」が3.4%を占めているという事実である。同時期の全日制・定時制卒業生の場合は、「左記以外の者」にあたる者が5.6%、「死亡・不詳の者」の割合は0.03%であることと比べると、その割合は非常に高くなっている。もちろん、通信制高校卒業後教育機関にも職場にも所属しない者の中には、入学前からの家業を継続する者や専業主婦（夫）を続けるものなども含まれているため、一概には言えないが、通信制高校関係者に対するインタビュー等の内容から判断すると、高校卒業後も自宅に引きこもってしまうものも少なくないようである。また、「死亡・不詳の者」の中には生徒本人だけでなくその家族とも全く連絡がとれなくなってしまう者も少なくないという声が聞かれた。

次に、設置者別に卒業生の進路状況を確認しておく。

【表3-1-4】 2002年度以降の公立通信制高校の卒業生の進路状況の推移

年度間	大学・専修学校等の教育機関に在籍者				就職者	左記以外の者	死亡・不詳の者	計
	大学等進学者(内数)		就職して いる者(内数)					
		通信制大学等 進学者(内数)						
2002	2,572	1,118	228	116	2,786	6,154	335	11,847
2003	2,340	965	211	69	2,829	5,601	293	11,063
2004	2,524	1,072	204	41	2,441	5,830	148	10,943
2005	1,523	669	120	29	911	3,552	461	6,447
2006	2,618	1,100	172	29	1,921	5,614	310	10,463
2007	2,605	1,243	178	26	2,015	5,735	145	10,500
2008	2,735	1,202	142	26	1,606	5,807	187	10,335
2009	2,786	1,229	174	23	1,386	6,068	150	10,390

【出典】 e-Statに掲載されている各年度版の「学校基本調査」を基に作成した。

まず公立通信制高校について、表3-1-4を基に見ておこう。すでに見たように、公立高校については2002年度以降在籍生徒数が減少傾向にあり、それに伴って卒業生の数も減少している。しかし、高校卒業後も引き続き大学等

の教育機関に在籍している者の数は増加しており、就職者が減少していることがわかる。ただ、教育機関に在籍している者の数もその割合もこの数年はほぼ一定になっている。大学・短大等への進学した者の割合を見ても 11%程度で推移している。他方、就職者の減少については、2008 年度間以降は、リーマン・ショックに伴う経済不況の影響をうけているためか、2009 年には 2002 年にくらべて半減している。2002 年度間以降減少傾向にあった「左記以外の者」も最近では増加傾向にあり、2009 年度間では 58.4%にまで上昇している。生徒の若年化と合わせて考えた時に、この数値の上昇は気になるところである。

それに対して私立通信制高校については表 3-1-5 のとおり、卒業生が増加傾向にある中で、教育機関に在籍している者の数がそれ以上のペースで増加していることが見てとれる。とりわけ、大学・短期大学の進学者は倍増している様子もわかる。「就職者」や「左記以外の者」の動向は公立高校とほぼ同じであり、やはり経済状況の影響をうけているようである。

【表 3-1-5】 2002 年度以降の私立通信制高校の卒業生の進路状況の推移

年度間	大学・専修学校等の教育機関在籍者				就職者	左記以外の者	死亡・不詳の者	計
	大学等進学者(内数)		就職して いる者(内数)					
	大学等進学者(内数)	通信制大学等 進学者(内数)						
2002	9,598	3,545	176	93	4,597	11,169	2,572	27,936
2003	10,838	3,805	161	15	4,277	11,122	2,527	28,764
2004	11,083	4,228	197	8	4,874	12,119	2,019	30,095
2005	5,001	2,073	87	4	1,865	6,496	806	14,168
2006	12,400	5,251	201	6	4,906	12,314	1,446	31,066
2007	13,480	6,100	185	14	5,428	11,520	2,032	32,460
2008	14,754	6,836	204	3	5,089	12,608	701	33,152
2009	16,023	7,171	197	12	4,585	13,067	1,389	35,064

〔出典〕 e-Statに掲載されている各年度版の「学校基本調査」を基に作成した。



## 第2節 インタビュー調査で指摘された通信制高校の生徒の状況

第1節では学校基本調査を基に、通信制高校に在籍する生徒の状況を生徒の数、年齢構成、卒業後の進路、の3つから概観してきた。そこでは、近年の少子化の進行の中でも通信制高校に在籍する生徒の数が増加傾向にあること、ただし設置者別にみると公立高校は減少傾向にあり、規制緩和の流れの中で学校設置会社による学校設置やこれまで技能連携校であった教育施設が通信制の高校になるなどして増加した私立高校の在籍者数が増加傾向にあることを確認した。また、若年化が指摘されていることも10歳台の生徒の占める割合が公立で50%を超え、私立で90%を超えていることから裏付けられた。他方、卒業生の進路は、大学・専修学校等の何らかの教育施設に入学する者が徐々に増加しているものの、全日制や定時制高校の卒業生に比べるとその割合はそれほど高くないこと、就職率については近年の経済状況の悪化の影響もあり低下傾向にあることを確認した。全日制や定時制ではあまり見られない進学や就職をしない者や死亡・不詳の者の割合がそれぞれ一定程度存在していることも明らかになった。もちろん、進学や就職をしないということは、元の稼業に戻ることも含まれるのであり、そもそも通信制高校が想定していた層の生徒が在籍していることを意味するものである。しかし、卒業後再び引きこもってしまったり、保護者ともども音信不通になったりするものが含まれているとの指摘もあり、通信制高校に在籍する生徒の多様性を示す数字でもあろう。

以下本節では、統計的な情報ではなく、今回の委託事業の中で訪問しインタビューしたいくつかの高校の具体的事例を提示してみたい。設置者の違いや地域性の違いで生徒の状況も極めて多様であることが理解できるものと思われる。

### 2-1 公立A高等学校の事例

A高等学校は中部地方にある狭域通信制の高校で多部制（三部制）・単位制の課程を併設している高校である。生徒数が多い頃には併設されていた全日制課程はマンモス校であったが、少子化の影響で全日制を廃止し、現在の形になっ

ている。子どもの数の変化や地域のニーズによって形を変えてきた高校である。2010年4月現在の在籍生徒数（休学者を含む）は、定時制（午前部・午後部）が405名、定時制（夜間部）が98名、通信制が2,257名の総計2,634名であった。それが、同年12月初旬の調査によると、通信制の在籍者は2,158名に減少していて、履修登録をして実際に学習を進めている「活動生（＝「実活生」と同義）」が全体の26.3%にあたる567名、「不活動生（＝「非活生」と同義）」が全体の73.7%にあたる1,591名となっている。公立高校でもあり、もともと安い授業料だったのに加え、今年度から無償化されたために、受講登録をしない不活動生となっても一切費用がかからなくなったことが、不活動生の割合を押し上げていると考えているようである。しかし、実際には一度不活動生になってしまうと履修登録を再開する生徒はわずか1%しかいない。そこで、来年度からは、8年間不活動が続いた生徒は戻る可能性がないものとみなし、除籍することとしている。それによって、在籍者数は1,400名程度になるとの見通しをもっている。ただし、単位制なので、除籍になっても面接を受けて復学することができ、学ぶ意欲がでてきた時には学習に従事することも容易である。

入学者は毎年200～240名、卒業者は100名前後、退学者は10名前後となっており、卒業率は50%程度である。居住地は学校の所在地周辺が最も多いが、鉄道で1時間以上かけてくる必要のある者も在籍している。かつては働きながら学ぶ年長者もいたが、現在では10歳台と20歳台が多く、活動生だけで見れば、20歳までの生徒がほとんどを占めている。また、難しい家庭環境や発達障害を抱えた生徒も多い。A高校に設置されているすべての課程に共通している中長期的な目標として、挫折を経験した生徒たちの「学び直し」と働きながら学ぶ場の提供を掲げている。ただ実際には、不登校の生徒の受入れもさることながら、学校としては働きながら学びたいという生徒に来てもらいたいという思いを持っている。しかし、実状は、働きながら学ぶ生徒は多くはなく、不登校、引きこもり、発達障害、病気など様々な問題を抱える生徒たちが集まっている。

例えば2010年度では、入学者242名のうち、一般生52名（21.5%）、転入学

141名（58.3%）、編入学49名（20.2%）であり、転入学者の占める割合が急激に増えている。さらに、この高校では、近隣の少年刑務所に分教室をもっており、10名程度が在籍している。他方、2009年度の卒業生の進路は、卒業生107名のうち、進学31名、就職4名、アルバイト・家居・その他72名となっている。就職希望は潜在的にはあるが、就職難の中でなかなか雇ってもらえないようである。とりわけ、通信制の卒業生を企業が一段低く見てしまい、正規雇用するところがないという問題も深刻である。また、卒業するのがやっとで、進学にも就職にも向かない生徒、卒業はしたけれど、生活環境がほとんど変わらない生徒も多い。その一方で、県内の進学校で不登校になってしまい、本校に転校してきて、有名大学に合格する生徒もいる。

A高校では、このように生徒の多様化が進んでいるため、「どこにターゲットを絞り、何を目指して指導していくのかといったグランドデザインが描けないままに、場当たりの対処している状態である」との自己評価をしている。「できるだけたくさんの生徒を卒業させてやりたいが、あまりにも低レベルな生徒を卒業させるわけにはいかないというジレンマもあり、闇の中にいる状態である」「時間をかけないと大人になれない生徒もいっぱいいるのに、なるべく効率よく卒業させていかなければならないというプレッシャーもある」など、現場の悲鳴にも似た声が聞かれた。

## 2-2 公立B高等学校の事例

B高等学校は北海道・東北地方にある狭域通信制の高校で単位制の職業学科を併設している高校である。入学者は毎年700名程度、卒業生が500名程度、退学が毎年100名以上いて、2010年度5月1日現在の総在籍者数は約4,800名である。毎年の入学者700名のうち、2年で卒業する者、3年で卒業する者、4年で卒業する者がそれぞれ120～130名いるため、4年以内で卒業するものが400名弱存在する。

近年、中学卒業とともに入学する生徒がふえており、10歳台が47%、20歳台が42%と若年化が進んでいるが、最高齢は80歳台であり年齢層は広い。不登校

経験者も増えており、病気療養中の生徒、身体障害のある生徒、発達障害のある生徒なども若干名であるが存在する。障害のある生徒の基本的な介助は当該生徒の保護者が行なっている。基本的には入学希望者を拒むことはないが、通信制教育における学習の進めかたを理解して入学するよう説明会を昨年度からはじめている。

毎年1月に未登録者に郵送で意思確認をし、特に意志表示がない場合には非受講として処理している。そして、住所不明になって1年間、休学しないまま2年間登録をしない場合は除籍をすることもあるが、その原則を機械的に適用することはない。また、「誰でも、いつでも、どこでも」という通信教育の基本に忠実にしたが、い、「ずっと待っている学校」でいる。実際、これまで最長在籍者は19年で卒業した者がいる。高校の卒業資格を得た後に自己実現を図る準備をするため、自学自習の学習姿勢を身につけさせるよう取り組んでおり、少ないながらも大学に進学した者に対して大学側からは学ぶ姿勢ができていているという評価を受けている。ただし、大学進学希望者が毎年10名未満でそれほど多くはない。基本的に進路決定は本人に任せているが、若年者が増えてきた10年前くらいに進路指導部が組織された。現状では、学校からは書面での進路関連情報の提供と希望者に対する進路面接会の開催などを行なっている。

生徒の若年化や勤労青少年の減少に伴い、スクールカウンセラーや養護教諭がいなくなることが課題となっている。スクールカウンセラーの派遣時間は今年度から年64時間と若干増加したが、スクーリング期間中でも養護教諭はいないため、保健室に通常の教員が待機して対応せざるをえなくなっている。

### 2-3 公立C高等学校の事例

C高等学校は関東地方にある高校で、それまで県内にあった全日制高校に併設されていた通信教育課程を基礎に設立された通信制独立校である。現在の定員は2000名で、2010年度の在籍者数は2103名である。毎年の新入生が300名程度、転・編入生が400～500名であり、250～300名程度が卒業している。在籍生徒の半数弱が3年で卒業しているようである。また、現在単位制となってい

るため、在籍上限を8年としている。実際C高校では、前年2月に翌年の履修計画をたてて登録手続きを行なわせている。在籍8年目の生徒には、もし登録手続きをしない場合は9月末付で退学することになることを伝えており、毎年一定数の生徒が一旦退学しているが、翌年4月に再入学することは容易である。

生徒の多様化が進んでおり、オリンピックをめざすことができるスポーツ選手や県内の私立進学校や公立全日制高校からの編入生も在籍している。その一方で、3回目の生徒指導（停学）で退学勧告をする高校が県内にあり、そのような高校からの編入生も増加している。中学卒業生についても、面接と作文だけで入試をしているが、「受験をする」というだけで学ぶ意欲があると見なしてきたこともあり、もともと学ぶ意欲がなく、友達が行くからという程度で進学してくる生徒が増えている。そもそも自学自習が中心となる通信制教育の特性を理解しないまま中学校側でも「せめて高校だけでも出ては」と進路指導しているようだが、そのような生徒は学校に来て授業に出ていない。そのような生徒が増えてきており、授業中に教室外で騒いでいる生徒も出てきている。そのため、名札をつけていないと授業には出席できないようにするなど、以前は考えられないような指導をせざるをえなくなっている。

その一方で、高齢の入学希望者や帰国生徒についても、受験時には調査書を求めるため、手続きが複雑で進学を諦めてしまう者もいるようである。通信制高校本来の役割でもある生涯学習の場にするためには手続きの簡素化が必要ではないかと考えている。

#### 2-4 公立D高等学校の事例

D高等学校は近畿地方にある狭域通信制・単位制の高校で、定時制（3部制）を併設している。2010年度5月現在、通信制課程の総在籍者数2,253名で、その内訳は昼間部1,274名、日・夜間部979名となっている。毎年中学卒業生が350名程度、転・編入生300名程度を受け入れているが、今年度の中学卒業生の中には、小・中学校の全期間欠席していた不登校経験者が10名含まれている。

複数の入試（方法は調査書審査と面接のみ）を実施しているが、中学校卒業

者を対象とする入試については、中学卒業後就職予定の者の受験が減っていて志願倍率が1倍未満の部がある。そのため、公立高校卒の資格取得を希望する特別支援要配慮者が多数受験して合格しており、結果的に入学者の約7割が学習障害やその他により配慮が必要な生徒となっている。そのような生徒に対応するために、休憩場所やレポート作成エリアなどの小部屋が多数必要になっているが、空きスペースが足りていない状況にある。

最長在学期間を8年に設定し、退学後の再入学を認めており、生徒1人ひとりに応じてゆっくりと学べるように配慮している。しかし、低年齢化しているだけでなく低学力で学習意欲が希薄な生徒が増えている現状では、公立学校の最後のとりでとして全日制の受け皿となっているだけでなく、特別支援学校と通信制の区分けがあいまいになっていて、特別支援学校の受け皿にもなっている。基礎学力があり、学習意欲もある勤労青少年を前提としていた教育方法では対応できなくなっている。中学校までの学習のケアや多様な身体および精神疾患のケアを必要とする生徒も増えており、保健室に来る生徒が階層化している。保健室の複数設置が必要な状況になっているようである。

## 2-5 私立E高等学校の事例

中部地方にあるE高等学校は、広域通信制・単位制の高校である。同一法人の中に、全日制高等学校、専修学校が設置されている。2000年頃から少子化の進行が顕著になり学校法人全体の学生・生徒数が減ったことが本校設立のきっかけになっている。設立当初から、全国で10万人といわれる不登校、病気の子など、なかなか学校に行けない子どもを受け入れる学校を目指していた。

2010年5月1日現在の在籍者数は330人であったが、12月には約390人に増加している。5月1日現在の在籍者の内、新入生（中学卒業または修得単位のないままの高校中退）が166名、転入生（高校在学中での転学）が146名、編入生（高校中退で一部修得単位あり）が18名である。年齢構成は、15歳が47名（14.2%）、16歳が73名（22.1%）、17歳が91名（27.6%）、18歳が66名（20.0%）、19歳が23名（7.0%）、20～24歳が27名（8.2%）、25歳以上が3名（1.0%）

と大半が 20 歳未満である。生徒の居住地は基本的に、通学圏内にある。しかも平日の昼間に学校に来ることが前提になっているため、勤労学生の占める割合は少ない。

卒業生の 3 分の 2 は大学に進学しており、就職する者は少ない。経済環境の悪化で就職がますます厳しくなっていることもある。また、広域にしたのは首都圏からの生徒募集を見込んでのことであったが、実際には生徒は集まらず、すでに実体として広域制ではなくなっている。

## 2-5 私立 F 高等学校の事例

F 高等学校は、関東地方にある狭域通信制・単位制の高校で、その前身は不登校経験者を対称とするクラスを設置した専門学校であった。2010 年度 6 月 30 日現在、生徒数 247 名。1 学年定員 75 名であるが、教室の制限上 85 名くらいまでは受け入れている。転・編入生も全学年で 20 名程度いる。学校の管理職が目届くところで教育をしたいという考えをもっており、サポート校などと連携しておらず、今後もその予定はない。また、学校法人が設置している高校であることから校舎の自己所有が義務づけられているが、少子化が進む現状において校舎の新規取得は困難であるとの判断から、比較的小さい規模を維持している。おなじく運動場の自己所有要件をクリアすることが困難であることから全日制ではなく通信制として発足していることもあり、週 5 日間通学制コースを基本としている。同コースでは制服着用を義務づけ、頭髪の染色、化粧やピアスなどの禁止など、高校生らしい規律のある生活を送るよう指導している。そのため、入学希望者でも説明段階で断念するものもいるようである。比較的小おとなしめの生徒が中学教員から紹介されて入学してくる例が多いということにも上記のような指導方針が影響している。

もともと不登校経験者を受け入れていたこともあり、在籍者の約半数が不登校経験者であるが、ほとんどが登校できるようになる。毎学年 1 - 2 名が学校に通学できない状況が続いているだけのようである。また、近隣の中学校の教員に学校の様子がよく知られていることもあり、教員による紹介で入ってくる

生徒が9割を占めている。実際、高等学校設立も不登校対象の専門学校での実績を背景に中学校側から強く要望されたこともある。

在籍する生徒のほぼ全員が3年で卒業している。卒業後の進路は、高等教育機関進学が70%であり、そのうち、40%が大学に進学している。ただし専修学校に進学する場合には、進学先がどのような教育方針であるか、特に不登校経験者に対する配慮がどうなっているか等を本校教員が確認した上で進路指導をしている。

法人の理事に学校の活動に協力的な医師1名を委嘱し、メンタルな面でのサポートができる専門職との連携をとっている。また、体育科担当の教員には養護教諭の資格をとるよう要請している。発達障害の研修を年1回全員で受けるようにしているなど、生徒の抱える課題に教職員集団が対応しようとする努力を続けている。

## 2-6 私立G高等学校の事例

G高等学校は、九州地方にある広域通信制の高校である。当初は専修学校の生徒向けに普通教育の機会を提供するために設置された高校で、全日制の課程も併設されている。協力校や技能連携校、科目履修校など本校以外の教育施設との連携はあるが、サポート校との連携はない。また、2010年には近隣の高等専門学校の退学者や転籍者向けの相談をうける施設も開設している。

2010年度の生徒数は全日制が235名、通信制課程単位制が297名、通信制課程技能連携制が842名である。また、同年度の広域通信制課程入学者数は、単位制74名、技能連携制364名である。広域通信制とは言っても、ほとんどの高校が所在する地域の在住者である。単位制の入学者の平均年齢は19歳で、中学卒業あるいは他の高校の中退者を受け入れている場合が多い。中退して本校に来た事情には、「もとの在籍校の授業が成り立たないために勉強したい」というものと、授業に出ないため単位がとれなくて中退となり本校に来たものの2タイプがある。また、経済的理由で専修学校の就学が継続できず、転籍してくる生徒も多いため、授業料を私学としては最低水準に留めており（1単位あた



り 4,800 円)、校納金総額を就学支援金でまかなえるようにしている。

もともと専修学校に就学する生徒たちに普通教育の機会を提供することが主たる目的であったが、全国の技能連携校が通信制高校として独立したり、閉校したりといった事情もあって、現在は地域の高校進学者の最後の受け皿としての機能が主となってきている。そのため、スクーリング時の座席を固定して、授業秩序の維持に努めている。また、中学校の復習からはじめられるよう、基礎的科目を学校設定科目として設定している。管理職は「ここが最後の砦である」ということを教職員に言い聞かせている。

## 2-7 私立（学校設置会社立）H 高等学校の事例

H 高等学校は関東地方にある広域通信制・単位制の高校である。廃校になった小学校の建物になるべく手をくわえず、できるだけ通える生徒は通わせたいという設置者の意向をうけて、在籍する生徒の 9 割がほぼ毎日通学している。2010 年度 5 月 1 日現在、1 年次生 238 名、総在籍者数 632 名であるが、3 年間の履修で約 9 割以上が卒業してきた。ただし、最近生徒数の増加に伴い、3 年間で卒業ができない生徒も増えてきている。年齢的には高校生の世代（=18 歳以下）が大半であり、不登校経験者も多い。本校に在籍する生徒は比較的静かな子が多いが、サポート校の生徒はサポート校の地域の状況により異なっている。ただし本校には、通学の際に学校のマイクロバスや乗用車で送迎しないと通えない生徒も多い。保護者は高校を卒業することを望んでいる、発達障害のある生徒や学習指導要領のカリキュラムについてこられない生徒がいることも確かである。

## 2-8 私立（学校設置会社立）I 高等学校の事例

I 高等学校は関東地方にある広域通信制・単位制の高校で、ネットを利用して学習する通信コース 2,900 名と通学コース 100 名の 2 コースを設置している。生徒総数は約 3,000 名である。通信コース生徒のうちサポート校所属が 2,500 名ほどいる。また、通学コースには電車で 1 時間圏内の生徒が所属している。

3,000名程度の生徒のうち1,200名が3年次生、残りの6割が2年次生となっており、学年があがるほど人数が多くなっている。その背景には転・編入がある。転・編入は随時可能で、年間1,000名程度で在籍生徒の80～85%を占めている。転・編入してきた生徒は以前に在籍していた高校での単位取得状況や、生徒個人の精神的な状況にもよるが、前に在籍していた高校の在籍期間とあわせてほぼ3年で卒業している。転・編入以外の入学者数も徐々に増えてはいるが、不登校経験者や特別支援が必要な生徒が大半である。年齢層はほぼ19歳以下である。構造改革特区の要件としてスクーリングを高校の所在地で行なうこととなっているが、そのような問題を抱えている生徒が多い状況で、スクーリング中にリストカットをする生徒などもいる。

卒業後の進路の実績は、2009年度で進学が60.3%、就職が9.1%、その他が30.6%となっている。

## 2-9 私立（学校設置会社立）J高等学校の事例

J高等学校は北海道・東北地方にある広域通信制・単位制の高校で、普通科を設置しているが、専門技術系のコースを含んでいる。各コースに週5日通学スタイル、自宅学習スタイル、両者の中間にあたる選択学習通学スタイルの3スタイルを設置しているが、コースによっては実習を伴う科目が多いことから、学校としてはできるだけ通学あるいは選択スタイルを勧めている。

2010年度5月1日現在、1年次生が238名、総在籍者数は632名となっており、3年間の在籍期間で約9割が卒業している。自宅学習スタイルをとる生徒は全体の3割程度だが、何らかのケアやサポートを必要とする生徒がほとんどである。J高校はサポート校を複数持っているが、訪問したサポート校についてはスクールカウンセラーが週に1～2回キャンパスを訪問しており、保護者がカウンセリングを希望することもある。

また、転・編入生には不登校経験者が多く、中には進学校から転・編入して来る生徒もいる。そのような生徒は学力的には高い場合が多い。このように在籍生徒の学力のばらつきが非常に大きくなっているため、昨年度から入学後に

学力テストを行ない、習熟度別に4つのクラスを設置している。学力の低い生徒達には基礎学力をつけるような取り組みも始めている。

卒業後の進路については、進学が6割だが専修学校が多い。就職は毎年30名程度である。就職希望者への対応（ハローワークへの訪問など）はサポート校の長自らが行なっている。しかし、専門技術系のプロとして活動するという理由で、進学も就職もしない生徒も多く、しかもそれを保護者が認めてしまっている場合が多い。

## 第3節 通信制高校の在校生に対する調査結果

### 3-1 アンケート調査の概要

本節では、通信制高校在校生に対するアンケート調査から生徒たちの状況をみていきたい。

第2章の「第1節 通信制高等学校に対する調査結果」においても述べたように、本委託事業では通信制高校を対象として郵送によるアンケート調査を行い、197校への送付に対して98校からの回答を得た。回答を得た98校のうち、回答内に担当者のメールアドレス連絡先が明記してあった高校（全59校）に対して、在校生にアンケート調査に協力してもらうよう依頼をした。

アンケートは、インターネット上の山梨大学大学教育研究開発センターのトップページからアクセス可能なものとなっており、通信制高校に通う生徒たちが個別に回答フォームにアクセスし、入力してもらう形をとった。質問項目は「現在の学業や生活」について聞いた以下の全25項目からなる。

#### 1. 現在在籍している高校へ進学動機やその理由について

1. 学びたい科目が提供されていたから
2. 学ぶ（単位を取得する）スタイルが自分にあっているから
3. 学校外の活動を充実させることができるから
4. 高校卒業の学歴が得られるから
5. 将来の進路を探す機会があるから
6. 就職したくなかったから
7. 周囲が高校進学をすすめたから
8. その他（ご自由にお書きください）

#### 2. 高校生活の卒業後への影響について

9. 卒業後の生活に通信制高校時代の学習や経験が活かされると思いますか

#### 3. 高校生活について

10. 自学自習の習慣が高校での学習に役に立っている

11. 他の生徒と一緒にスクーリングなどをうけることは楽しい
12. スクーリングなどで高校に行くことが楽しい
13. サークルや部活などの課外活動が楽しい

#### 4. 学校側からの支援・指導について

14. 入学時に通信制での学習方法について十分な指導があった
  15. レポートの添削指導は丁寧に行なわれていると思う
  16. 各科目の単位の取得は比較的簡単だと思う
  17. スクーリングは学習を進める上で役に立つと思う
  18. 生徒の経済状態にあわせた適切な支援が行なわれていると思う
  19. 学校から受けた進路についての指導には満足している
  20. 学校の生活指導は生徒の状況にあわせて適切に行なわれていると思う
- あなたのプロフィールを可能な範囲で教えてください。なお、21～24は、できるだけ回答してください。

#### 5. 在籍状況や進学理由等について

21. 通信制高校に入る前のあなたの状況を教えてください  
中学卒業後すぐに通信制高校に入学した  
全日制高校に通学していた  
定時制高校に通学していた  
中学卒業あるいは高校中退の後、働いていた（アルバイトも含む）  
中学卒業あるいは高校中退の後、とくに何もしていなかった
22. 通信制高校に在籍している年数を教えてください  
1年未満  
1年  
2年  
3年  
4年  
5年以上

## 6. 年齢・性別について

### 23. 年齢

※本年4月1日時点での年齢

15歳 16歳 17歳 18歳 19歳 20歳～29歳 30歳～39歳 40歳以上

24. 性別 男性 女性

## 7. 所属について

### 25. 在籍高校名

### 3-2 アンケート調査結果から見える通信制高校の生徒たち

結果、52名の通信制高等学校在籍者の回答を得た。ただし、この52名の在籍校は、おそらく中部地区の公立校2校に限られたものだと推測できる。したがって、ここで示す結果の概要は、通信制高校の在校生の一面を知る手がかりとなる材料にとどまることをお断りしておく。

まず、以下にアンケート結果の一覧を示す。(数字は回答数)

現在在籍している高校へ進学動機やその理由について	強くそう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	まったく思わない	無回答
(1)学びたい科目が提供されていたから	7	17	20	8	
(2)学ぶ(単位を取得する)スタイルが自分にあっているから	21	22	7	2	
(3)学校外の活動を充実させることができるから	14	21	12	4	1
(4)高校卒業の学歴が得られるから	38	11	2	1	

(5)将来の進路を探す機会があるから	16	17	13	6	
(6)就職したくなかったから	3	7	8	34	
(7)周囲が高校進学をすすめたから	12	14	11	15	
(8) その他					

高校生活の卒業後への影響について	強くそう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	まったく思わない	無回答
(9)卒業後の生活に通信制高校時代の学習や経験が活かされると思いますか	14	25	8	4	1

高校生活について	強くそう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	まったく思わない	無回答
(10)自学自習の習慣が高校での学習に役に立っている	14	25	11	2	
(11)他の生徒と一緒にスクーリングなどをうけることは楽しい	12	19	11	10	
(12)スクーリングなどで高校に行くことが楽しい	8	24	14	6	

(13)サークルや部活などの課外活動が楽しい	6	14	15	12	5
------------------------	---	----	----	----	---

学校側からの支援・指導について	強くそう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	まったく思わない	無回答
(14)入学時に通信制での学習方法について十分な指導があった	16	19	15	2	
(15)レポートの添削指導は丁寧に行なわれていると思う	18	21	10	3	
(16)各科目の単位の取得は比較的簡単だと思う	5	23	14	10	
(17)スクーリングは学習を進める上で役に立つと思う	23	19	8	2	
(18)生徒の経済状態にあわせた適切な支援が行なわれていると思う	15	29	4	4	
(19)学校から受けた進路についての指導には満足している	11	23	11	5	2
(20)学校の生活指導は生徒の状況にあわせて適切に行なわれていると思う	13	27	9	3	



在籍状況	1年	2年	3年	4年以上	無回答
(22)通信制高校に在籍している年数を教えてください	14	12	12	12	2

	男性	女性	無回答
(24)性別	22	29	1

計 52 名の回答者の男女別内訳は、男子 22 名、女子 29 名、無回答 1 名であった。また、通信制高校に在籍している年数については、1 年目が 14 名、2 年目が 12 名、3 年目が 12 名、4 年目以上 12 名、無回答 2 名と成っている。回答者の男女差や学年（在籍年数）による偏りはないと言えるだろう。年齢は、18 歳以下が 33 名、19 歳以上が 18 名という構成である。通信制高校に入学するまでの状況は、「中学卒業後すぐに通信制高校に入学した」生徒が最も多く 20 名、次いで「全日制高校に在籍していた」生徒が 17 名、「定時制高校に在籍していた」生徒が 4 名であった。先にも触れたように、通信制高校の低年齢化が進んでいること、転入・編入生が増加している昨今の傾向がそのまま見て取れる。

まず、「現在在籍している高校への進学動機やその理由」を聞いた 8 つの項目のうち、「強くそう思う」と回答した生徒数が最も多い項目は、「高校卒業の学歴が得られるから」であり、その数は 38 名であった。「どちらかといえばそう思う」の 11 名を入れれば、94.2%を占める。中でも、全日制に在籍していた経験をもつ生徒は、17 名中 13 名が「強くそう思う」と答え、残りの 4 名も「どちらかといえばそう思う」と回答している。なんらかの理由で全日制から移ってきた生徒たちにとっては、高校を卒業したい、という思いが強いのかもしい。

「強くそう思う」と回答した者が次いで多いのが「学ぶ（単位を取得する）スタイルが自分にあっているから」の 21 名、「どちらかといえばそう思う」の 22 名を加えると、82.7%になる。また、「学校外の活動を充実させることができるから」という進学動機についても、「強くそう思う」14 名、「どちらかといえばそう思う」21 名と、両方をあわせると 35 名（67.3%）に上る。他方、「まっ

たく思わない」と回答した数が 34 名と最も多かった「就職したくなかったから」という理由については、「どちらかといえばそう思わない」の 8 名を加えると 80.8%を占める。

また、「どちらかといえばそう思わない」20 名、「まったくそう思わない」8 名と、否定的な回答が半数以上示された項目に「学びたい科目が提供されていたから」があげられる。「学ぶ（単位を取得する）スタイルが自分にあっているから」と回答しているにも関わらず、「学びたい科目」、つまり学びたいことが何か、にはこだわりがないようにも読み取れる数字である。

高校生活についての問いに対しては、「自学自習の習慣が高校での学習に役に立っている」と「強くそう思う」14 名、「どちらかといえばそう思う」25 名と、両方をあわせて 39 名（75%）を占める。また「スクーリングなどで高校に行くことが楽しい」と答えた生徒は、「強くそう思う」8 名、どちらかといえばそう思う」24 名と計 32 名になり、「どちらかといえばそう思わない」14 名、「まったくそう思わない」6 名の計 20 名よりも多い。さらに、「サークルや部活などの課外活動が楽しい」と感じている生徒も、「強くそう思う」6 名、「どちらかといえばそう思う」14 名と、課外活動を楽しんでいる生徒は半数に満たない。反対に、課題活動を楽しんでいるとは思っていない生徒が 27 名（「どちらかといえばそう思わない」15 名、「まったくそう思わない」12 名）、またサークルや部活動自体に参加していないと考えられる無回答の 5 名もいることから、通信制在校生にとっては、課外活動は特に積極的に参加している活動ではないようにも見える。しかしながら、「他の生徒と一緒にスクーリングなどを受けることは楽しい」と回答する生徒は、「強くそう思う」12 名、「どちらかといえばそう思う」19 名の計 31 名であることから、友達等と会える事、だれかと交流を持つことについては、肯定的に感じている生徒のほうがそうでない生徒よりも多い。

スクーリングについては、「学校側からの支援・指導について」の問いにおいても聞いている。「スクーリングは学習を進める上で役に立つと思うか」という問いには、「強くそう思う」と答えた生徒が 23 名と最も多く、「どちらかといえばそう思う」19 名を合わせると計 42 名（80.8%）が肯定的評価をしている。スクーリングなどで高校に行くことが楽しく、またスクーリングが学習を進める上で役に立つと感じているのであれば、通信制高校を選ばず、通学型の高校に

通うことが、より彼らの希望を満たすことができる方法のようにも考えられる。

また、「生徒の経済状態にあわせた適切な支援が行われていると思う」という問いに対しても、「強くそう思う」15名、「どちらかといえばそう思う」29名の計44名(84.6%)が高く評価している。これについては、アンケートに回答した生徒が公立に在籍していることに留意が必要であり、私立の通信制高校在校生との比較も必要かもしれない。

他方、「学校から受けた進路についての指導には満足している」という回答は必ずしも高くない。「どちらかといえばそう思う」が23名で最も多く、「強くそう思う」と「どちらかといえばそう思わない」が11名で同数となっている。この結果は、回答者が公立校在校生であることから、在籍人数も多く、学校側に指導を十分できるような時間やスタッフがいないからとも推測できる。また、言うまでもなく制度上の通信制高校の出発は、「有職青年」のための教育機関であり、「進路指導」という教育活動は想定されてこなかった。しかしながら、報告者がこの度の一連の訪問調査にて行なった狭域通信制の公立高校における関係者へのインタビューの際、在籍者の若年化が増加の一途をたどる中、進路指導の必要性が高まってきている認識をもっていることを関係者たちは指摘しており、それにもかかわらず現状における人員その他の体制は十分でない認識を持っていたことにも留意が必要であろう。

学習面について在校生たちはどのように考えているのだろうか。「各教科の単位の取得は比較的簡単だと思う」という問いに対して、「強くそう思う」5名、「どちらかといえばそう思う」23名と、半数強の生徒が比較的簡単に単位取得ができるという印象を持っている。同じ問いを、在校生たちの通信制高校に入学するまでの経緯の違いに着目してみると、全日制高校からの編・転入生は、17名中、「強くそう思う」2名、「どちらかといえばそう思う」10名と、12名が比較的簡単だと意識している。一方、中学卒業後すぐに通信制高校に入学してきた生徒は、「強くそう思う」3名、「どちらかといえばそう思う」8名、「どちらかといえばそう思わない」6名、「まったく思わない」3名と、単位取得は難しいと感じている生徒も20名中9名いることがわかる。次節に示す通信制高校の卒業生に対するインタビュー調査の中で、全日制の高校から通信制に編転入した経験をもつ者が自らの通信制高校での学習面を振り返り、繰り返し、「単位

の取得は実に簡単であった」、「なぜなら通信制高校の学習内容は、全日制の際に学んでいた知識で十分に事足りた」と話す者がいたことや、進学校とされる中学に身を置いていた者は、「中学のときに習った知識で通信制高校での学習内容はカバーできた」と指摘していたことを示しておく。

ところで、「高校生活の卒業後の影響について」どのように感じているかの結果にも、全日制高校からの転・編入生と中学卒業後にそのまま入学した生徒とに違いが見られる。「卒業後の生活に通信制高校時代の学習や経験が活かされると思いますか」という問いに対し、まず、全体の結果は「強くそう思う」14名、「どちらかといえばそう思う」25名と、52名中、39名の生徒が活かされると感じている。入学経緯の違いで見ると、中学卒業後すぐに通信制高校に入学した生徒たちは、「強くそう思う」7名、「どちらかといえばそう思う」12名と、20名中19名が通信制高校時代を今後の人生で活かすことができると感じている。しかしながら、全日制高校からの転・編入生は、「強くそう思う」2名、「どちらかといえばそう思う」7名、「どちらかといえばそう思わない」5名、「まったく思わない」2名、「無回答」1名、と決して肯定的に通信制高校時代を受け止めている生徒ばかりではないようにも読み取れる。確かに、全日制高校において高校生活になじめなかった場合や、なんらかの問題があって、通信制高校に転・編入してくる生徒は多いので、挫折感などの負の意識をもって通信制高校に在籍していることも想定できる。

今後、サンプル数を増やし、公立私立等の設置形態別での分析が必須である。また、学びの方法やその質を知るためにも、生徒たちからの声を聞きたい。スクーリングが楽しく、学ぶのに役に立つと答えているその内実と、レポート課題の内容や程度、そのあり方についてどのように生徒たち自身が評価しているのかに耳を傾けることも必要である。

## 第4節 通信制高校の卒業生に対する調査結果

### 4-1 調査概要・方法

本節では、通信制高校卒業生、特に、全日制高等学校の卒業生の進路のうちもっとも割合の高い、大学等の教育機関への進学者に焦点を当てたい。本章第1節において、通信制高校卒業生の卒業後の進路は、学校基本調査を用い、その種別と数を2002年から2009年まで年次別に示した。表3-1-3に示された「2002年度以降の通信制高校全体の卒業生の進路状況の推移」に示された直近の2009年度データによれば、通信制高校全体の卒業生総数は、45,454名であり、その進路状況は、①「大学・専修学校等の教育機関在籍者」18,809名(41.4%)、②「就職者」5,971名(13.1%)、③「①②以外のもの」19,135名(42.0%)、④「死亡・不詳のもの」1,539名(3.49%)となっている。最も割合が高いのは、大学・専修学校等の教育機関在籍者でも就職者でもない者たちであり、その実態を明らかにすることが今後の大きな課題であろう。

しかしながら、ここでは、卒業生に占める進路として、卒業後の状況が不明な者たちとほぼ同率で高い、「大学・専修学校等の教育機関在籍者」、つまり「進学者」を対象として、1. 彼らにとって通信制高校とはいかなる存在であったのか、2. そこで受けた教育はどのようなものであったか、3. 彼らの今日にどのような影響を与えているのか、に着目し、生徒側からみた通信制高校の実態を見ていきたい。

確かに、第1節において、通信制高校の卒業生の進路において、大学等の教育機関に進学する割合は、全日制高校に比して多くはないながらも、その数は増加傾向にあり、また私立学校においてはその増加傾向が顕著であることを確認した。表3-1-5に示された「2002年度以降の私立通信制高校の卒業生の進路状況の推移」にあげた、全卒業生数に対する大学・専修学校等の教育機関在籍者の比率は、2002年、34.4%、2006年、40.0%、2007年41.5%、2008年44.5%、2009年45.7%と確かに増加しており、半数に届く勢いである。さらに、そのうち就職している者と、専修学校への進学を除く、「大学等進学者」を見ると、2002年12.7%、2006年17.0%、2007年18.8%、2007年20.6%、2009年20.4%とやはり増加傾向が見て取れる。

そこで、「大学等進学者」の一面を知るために、以下、通信制高校を卒業し、

A大学（首都圏にある四年制私立大学、中規模校）に在籍する学生へのインタビュー調査の結果を示したい。ただ、調査の限界として、学生自らの意思で調査協力を申し出る形をとっているため、通信制高校に対してなんらかの思いを強く抱いている者である可能性がある。また、私立四年制大学への進学を果たしたことから、ある一定の経済的、学力的条件がそろっている対象者であることも想定される。

調査は、A大学に在学する通信制高等学校卒業生のうち、本事業研究調査への協力が得られる学生を対象とした。まず質問紙調査への回答を呼びかけ、質問紙の中で、インタビュー調査にも協力が得られるかどうかを聞いた。

- (1) 2010年11月初旬よりA大学学内者限定のネット上掲示板を用い、全学生宛てに調査概要説明および調査協力依頼を行った（資料A）。掲示板から質問紙（資料B）にもアクセス可能としておき、掲示内容を見て協力の意思のある学生は、質問紙に回答し、調査者宛て e-mail に添付して送信できるよう依頼した。あるいは印字の上、学内メールボックスに投函するよう依頼した。なお、質問紙には、面接の協力が得られるかどうかに関する項目も設定した。
- (2) (1)において、面接に協力すると答えた学生に、2010年11月中旬～2011年1月初旬に渡って、学内の教員研究室など、調査対象の回答内容が他に漏洩しない場所を使用して面接を実施した。面接は1名当たり1時間以内とした。

(資料A)

通信制高校卒業生の皆さんへ

通信制高校卒業生の高校・大学における学習実態に関する研究へのご協力をお願い

この掲示は在学中の全学生に向けて発信していますが、通信制高校卒業生を対象にするものです。該当しない方は、無視してください。

私たちは、現在、文部科学省の委託を受けて通信制高等学校の第三者評価の手法を開発する研究に携わっています。第三者評価とは、学校とは直接かかわりを持たない大学の研究者、教育委員会の関係者、他の高等学校教職員などが、それぞれの専門性を生かして学校の改善を支援するために行なわれるものです。

このたび、この研究の一環として、高校在学時と現在の学習の様子を聞かせていただき、在学経験者の視点からよりよい通信制高等学校とは何かを明らかにするため、本学在学中の通信制高校卒業生を対象としたアンケートを企画しました。これから通信制高校で学ぶ生徒たちの学習環境を改善・充実するためにも、本掲示に添付されているアンケート「通信制高校卒業生に対するアンケート調査」にご回答くだされば幸いです。

(以下、連絡先等略)





ありますか。 [ ]

④大学生活について

④-1 高校時代の自学自習の習慣が大学での学習に役に立っている  
[ ]

④-2 他の学生と一緒に授業をうけることは楽しい [ ]

④-3 大学に通学するのは楽しい [ ]

④-4 サークルや部活などの課外活動が楽しい [ ]

2. 通信制高校に在籍していたときについてお伺いします。

①在籍状況や進学理由等について

①-1 通信制高校に入る前のあなたの状況を教えてください。以下の1～5の中から該当するものを一つ選んでください。 [ ]

1. 中学卒業後すぐに通信制高校に入学した

2. 全日制高校に通学していた

3. 定時制高校に通学していた

4. 中学卒業あるいは高校中退の後、働いていた（アルバイトも含む）

5. 中学卒業あるいは高校中退の後、とくに何もしていなかった

①-2 通信制高校に在籍していた年数を教えてください。以下の1～5の中から該当するものを一つ選んでください。 [ ]

1. 1年未満 2. 1年 3. 2年 4. 3年 5. 4年

6. 5年以上

②学校側からの支援・指導について

②-1 入学時に通信制での学習方法について十分な指導があった。  
[ ]

②-2 レポートの添削指導は丁寧に行なわれていたと思う。 [ ]

②-3 各科目の単位の取得は比較的簡単だったと思う。 [ ]

②-4 スクーリングは学習を進める上で役に立ったと思う。 [ ]

②-5 生徒の経済状態にあわせた適切な支援が行なわれていたと思う。

[ ]

②-6 学校から受けた進路についての指導には満足している。

[ ]

②-7 学校の生活指導は生徒の状況にあわせて適切に行なわれていたと思う。

[ ]

3. あなたのプロフィールを可能な範囲で教えてください。なお、①と②は、できるだけ回答してください。

①学年 : 1. 1年 2. 2年 3. 3年 4. 4年 [ ]

②所属 : [ ]

③性別 : 1. 男性 2. 女性 [ ]

④出身高校名 : ( )

⑤学籍番号 : ( )

⑥氏名 : ( )

4. このアンケートを基にした面接(1時間以内)にご協力いただけますか?(面接までご協力いただいた場合には些少ですが謝金をお支払いします。)

1. 協力してもよい 2. 協力したくない [ ]

#### 4-2 質問紙およびインタビュー調査からみた通信制高校卒業生

第1節の調査協力への呼びかけに対し、結果、5名の通信制高校出身者からの質問紙回答を得た。5名ともに出身通信制高校は、私立の広域性高等学校であり（内1名 技能連携校、内1名 サポート校）、また籍を置いていたのは通学型のコースであった。5名の男女の別は、男子3名、女子2名であった。また5名ともにインタビュー調査に応じることを承諾してくれたため、5名全員に対して先に回答を得ていた質問紙に沿って半構造的にインタビュー調査を実施した。

それではまず、質問紙への回答結果を見ていく。質問紙への回答は上記に示したように、原則的に4：強くそう思う、3：どちらかといえばそう思う、2：どちらかといえばそう思わない、1：まったくそう思わない、の4択となっている。

まず、現在の大学における学業や生活についての質問項目において、「1. A大学への進学動機やその理由について」には、「学びたい科目が提供されているから」という選択肢に、「強くそう思う」（1名）と「どちらかといえばとそう思う」（3名）と回答している。また、「留学プログラムが充実しているから」と、「将来の進路を探す機会があるから」には、2名が「強くそう思う」と回答した。「周囲が大学進学をすすめたから」という問いには、「強くそう思う」（2名）、「どちらかといえばそう思う」（2名）となっている。一方、「就職しなくなかったから」という問いには、1名のみが「どちらかといえばそう思う」という回答をしているにとどまっている。インタビューをしてみると、A大学の詳細な情報を熟考して入学を決めたというよりは、入試方法（公募制推薦、AO入試）から周囲が受験を勧めたことのほうが影響が強かったようにも見受けられた。実際に、入試形態は、公募制推薦による入学者が3名、一般入試による入学者が2名となっている。

現在の「大学での学びに通信制高校時代の学習や経験が活かされていると思うか」という問いには、「強くそう思う」が3名、「どちらかといえばそう思う」が2名と、全員が通信制高校時代を肯定的に評価していることがわかる。実際に卒業生たちのインタビューを行なうと、彼らはそれぞれに、悩んでいた期間があり、その抱えていた問題を打破することのできた、そのきっかけとなった

通信制高校時代という意味合いが強く、「現在の自分があるのは通信制高校時代のおかげである」と意識がとても強いことがわかった。

また、現在「大学に通学することは楽しい」かと、「他の学生と一緒に授業を受けることは楽しい」という問いには、2名が「強くそう思う」、1名が「どちらかというと思う」と回答した。インタビューにおいても、通学型の通信制高校時代を送ったため、大学における集団生活において、特に大きな変化を感じている者はいなかった。ただ、クラス規模が大きくなったこと、回答者によっては、300名ほどの大規模な人数の講義に出席することが、入学当初は緊張したと答える者もいた。

一方で、「高校時代の自学自習の習慣が大学での学習に役に立っている」と思うかという問いには、「どちらかといえばそう思わない」（1名）、「まったくそう思わない」（4名）と、全員が「そう思わない」と回答している。調査者側としては、当初この質問項目を設置した理由として、通信制高校に在籍したことにより「自学自習」のスタイルが身についたかどうかについて知りたい意図があった。しかしながら、5名ともに週5日間の通学型の高校出身であり、「自学自習」が通信制高校在籍時代の学習方法の中心であるという認識がなかったことが背景にあったことが考えられる。彼らは、授業中での学んだという意識が強い。たとえレポート課題（授業以外での学習）が課せられていたとしても、いかに短時間で、提出時期を守って効率的に行なうか、ということに在籍時代は気をかけているようであったので、自らを律して計画的に勉学に取り組む習慣を身につけるというイメージは彼らの中にはなかったようであった。

実際、質問紙への回答をしてきた際、5名共にそれぞれが、自分は確かに通信制高校の出身者であるが、「毎日通学する」形を取っている学校に在籍していたため、調査目的である「通信制高校の出身者」と名乗っていないのかわからない、と申し出てきたところが興味深い。生徒自らが、通信制高校とは、やはり「学校に通わない」方法で、学ぶことができる場所であるという認識があることが見て取れるし、通学型という自分たちの選んだ方法は、変わっているとまではいえないながらも、何か違うのではないかと感じていることもわかった。ただ逆に中学までの生活スタイルと変わらないので、なじみやすかったと回顧する学生もいた。

質問紙の後半は、通信制高校時代について聞いた。まず、入学時期について、「中学卒業後すぐに通信制高校に入学した」と回答したのが、5名中3名、中学卒業後すぐに全日制高校に入学し、その後通信制高校に転入した者が2名であった。いずれの学生も、定時制高校に通った経験も、就労していた時期もなく、中学卒業後、すぐに通学型の高校生活を送ったと言える。また、5名ともに、高校生活は3年間で修了している。

高校側からの支援・指導については、いずれの問いに対しても概して肯定的な回答をしている。「入学時に通信制での学習方法について十分な指導があった」という問いに対し、「強くそう思う」2名、「どちらかといえばそう思う」2名、「レポートの添削指導は丁寧に行われていたと思う」には、「強くそう思う」1名、「どちらかといえばそう思う」3名、「学校から受けた進路についての指導には満足している」には、「強くそう思う」1名、「どちらかといえばそう思う」4名、「学校の生活指導は生徒の状況にあわせて適切に行われていたと思う」には、「強くそう思う」3名、「どちらかといえばそう思う」2名となっている。総じて、インタビューにおいては、高校で出会った教員たちが、いかに熱心で親身であったのかを指摘していた。1名の女性回答者は、通信制高校時代の一教員との出会いが自らを全て変え、その教員によって、素晴らしい仲間を得ることもでき、今の自分はその教師がいなければならない、と熱く語っている。他方、教員たちの多忙さと疲弊した様子を指摘した者も複数いた。24時間体制で自分たちとともにいてくれ、それゆえに信頼できたと回想する者もいた。

「生徒の経済状況にあわせた適切な支援が行われていたと思う」という問いに対しては、回答は、「強くそう思う」1名、「どちらかといえばそう思う」1名、「どちらかといえばそう思わない」1名、「まったくそう思わない」1名、無回答1名と、多様であった。インタビューの際、その回答の背景を尋ねたところ、「自分は経済的に恵まれていたからこの通信制高校で学ぶことができた」、「経済的な面で、入学したくてもできない人もいる学費設定である」、「学費は高いと思うが、これだけ丁寧に指導してくれるので当然かもしれない」といった回答が寄せられた。さらに、「学費は高かったと思うが、先生たちの給与には反映されていないらしく、先生たちは安い給与で不眠不休で自分たちを指導してくれていたと思う」と話した者もいた。修学旅行以外にもさまざまな小さな

旅行や研修会と称した課外活動があり、そのたびに高額の参加費が必要であったと回答した者もいた。自分は保護者が積極的に参加させてくれたから恵まれていたと思うが、クラスメイトの中には、経済的な理由からまったく参加できない人もいて、とても辛かったと語った。調査者が今回行なった高校への訪問調査の中で、学費以外に、特別活動の度に活動費を請求する学校が多いことについて、批判的に指摘する学校関係者もいた。

質問紙の項目中、5名全員が「強くそう思う」と回答した項目が1つだけあった。「各科目の単位の取得は比較的簡単だったと思う」という回答である。対象者が5名ではあるものの、私立の広域性通信制高校出身者である者たちが、全質問項目でこの項目だけに全員一致して「強くそう思う」と回答していることには留意すべきであろう。高校時代に、簡単に良い成績を取ることが可能であることや、学習到達度ではなく、テクニク的に良い成績を取る方法を知ってしまった自分を、笑いながらインタビューで語った者もいる。それゆえに5名全員が、自分たちは本当に高校卒業程度の学力を備えているのか、全日制の高校を卒業した人たちと同じ学力だと言えないのではないかと、といった学力面での不安を少なからず抱えている。大学進学にあたっては、学力面の不安から、本来自分希望する大学をあきらめた者もいた。大学入学後、さまざまな授業を受けそして単位修得をしていく中で、また友人たちとの関係の中で、学力不安に対して軽減されている様子を見て取れたものの、高校在籍中、そして次の進路選択の場面で常にそうした思いを抱え続けていたことには注意を要する。

以下、質問紙調査をもとに、反構造的に行なったインタビューの内容を紹介したい。

## (2) 事例1 (男性Pさん)

### <大学への入学動機>

Pさんは、経済学や情報科学といった分野を学びたいことから、それら両分野を学ぶことが可能なカリキュラムが用意されていると思われたA大学への入学を決めたという。Pさんの両学問分野への興味は、高校1年次の後半くらいから、自分の時間の中で、書籍等を読む中で強くなってきた。全日制の高校と比べて、卒業までのカリキュラムが「緩めに作られている」と感じ、時間的な

余裕があり、自分の好きなことを調べたり、読書をしたりする時間があったと振りかえっていた。ただ、高校時代には、将来に就きたいと思う職種は特に具体的には思い浮かばなかった。そこで、大学生活の4年間、好きな学問分野を学んでいく中で何かが見つかるのではないかと、また、「余裕を持ちたい」という思いもあり、大学進学を決めたという。Pさんは、大学入学以後、希望どおり国際経済学と情報科学を中心に学び、現在は、学生で組織される経済学の学会の企画運営にも携わっているという。

通信制高校の関係者は、Pさんに対し、四年制大学への進学を応援してくれたものの、特にそれを強く勧めたわけではなかった。それよりも親の言葉に影響を受けたという。現在は5割が大学に進学するようになっていること、不景気ゆえに、勉強はしておいたほうがいい、というような父親からの勧めであった。

#### <通信制高校への入学の背景>

中学時代は不登校であり、中学の担任教員から保護者に対して、結局、Pさんが通った、広域性の私立の通信制高校の紹介があったことが通信制の道を選んだきっかけだった。Pさん自身は、高校には行かれないかもしれない、大学ももう無理かもしれない、と思っていたときであったので、担任教員に紹介されるままに説明会に参加し、受験をしたという。当時は、通信制高校にもたくさん種類や数があることは知らず、そもそも通信制高校という存在自体をよく知らなかったこともあって、いよいよ入学することになった際に、本当にこれでよかったのかを改めて思ったほどであった。

高校への入学にあたり、通信制高校の関係者、中学校の担任教員、Pさんの保護者、Pさんで中学校を会場に面談がもたれた。その際、通信制高校関係者は、週5日間の通学型をとっていることを最も注意深くPさんに説明し、また通うことができそうかを気にかけてという。高校側は、入学後にも、通信制の設置形態をとっている理由として、これまで不登校や学校生活になじめなかった子どもたちが学校に通えるようになり、そして卒業もできるようになるためであると説明したという。つまり、あくまで高校側の目指す生徒たちの状態は、通学型の高等学校であるけれども、多様な問題や理由を抱えた生徒の状況を考慮して、より柔軟な方法で単位取得が可能である通信制高校の形態をとってい

ると考えられる。

#### <通信制高校の学習方法とその内容>

Pさんは、月曜日から木曜日は、朝9時から15時半くらいまで学校にいて、午前中4時限分とお昼休みをはさみ、午後1時限か2時限分の授業に出席していた。Pさんの通った高校は、金曜日は、「ゼミ」の日であり、生徒たちはそれぞれ自ら興味のあるテーマを扱うゼミに所属していた。各ゼミを担当する教員がおり、1年生から3年生まで、学年もクラスも混同で活動する時間となっており、調べ学習や学校外での活動なども行なった。Pさんは、自分が「外に出る」ようになったことや、「活発になった」きっかけとなったと話す。

Pさんの在籍した週5日間通学するコースの場合、授業は、教科ごとに学力別にクラスが編成されていた。各クラス20名から30名だったという。学校に来ることが難しいと感じる生徒を対象にした週に1回通うコースも設置されていたが、そうしたクラスに在籍していた生徒たちも、次第に学校に通えるようになる者が多くなり、週5日通うクラスへ移籍し、2年次にあがるころには、そうした週1回通うコースの生徒はいなくなったという。ただし、すべての生徒たちが学校に通えるようになるわけではなく、なじめずに退学する生徒もいたという。例えば、Pさんの友人は、音楽活動を行っており、通信制高校に入学した理由は、自らのペースで自宅学習を中心に学ぶことができる高校であると考えたからであったが、実際には通学を奨励され、全日制高校の形態と同様であったことを理由に退学をしたという。Pさんの学年では、120名ほどの入学者がいたが、卒業時には100名ほどになったという。

毎日の学習は、授業とレポート課題の2本立てであった。レポート課題は、問題集のような形態で存在し、随時、複数科目の課題が配布され、取り組む箇所と提出日が指定された。レポート提出は、ファクスにて行い、添削されて返却された。レポート課題の内容と通学時の授業内容とはほとんど連動しておらず、添削担当者も授業担当者とは異なった。添削担当者の顔も声も知ることはなかった。レポート課題は生徒が独自に、レポート課題上に示されている教科書の該当ページを見ながら取り組むようになっていたが、示されている教科書の該当ページが複数ページにわたっていることなどから、必ずしも教科書を読むことでレポート課題が解けるわけではなかった。ただし、そうしたわからな



い箇所や質問がある場合には、通常授業担当の教員にホームルーム時や通常授業時に聞くことが可能であった。「これはとても良かった」とPさんは評価している。もちろん、レポート上に、添削者への質問として指定された場所に記入して提出し、添削（回答）を待つこともできたが、その回答を待つよりも、すぐに自らの疑問を解決してくれ、レスポンスを得ることができる授業担当者への問いかけをPさんは好んだ。添削の場合、やはり簡単な文章で書かれている場合が多く、時間にズレがあることだけでなく、時に自分がしたい質問のニュアンス等も伝わりにくいとも感じていた。したがって、Pさんは、レポート課題については添削担当者とはほとんど連絡はとらず、質問をファクスを用いて行なうこともなかった。

レポート課題の難易度については、全体について改めて振り返ってみると、分からないところ等はあったとは言えども、特に難しいとは感じなかったという。また、どのように取り組むか（回答するか）というよりも、期限を守ることに注意を払い、それがよい成績を取るためにより重要であることがわかったので、時にはわからない箇所を空白にして提出したこともあったという。

単位は、日々の授業に出席し、試験前にある程度勉強しておけばよい成績とともに取得することができた。クラスは学力別に編成されているとはいうものの、やはり同じクラス内においても学力差は大きく、時に手持ち無沙汰のような気持ちになることもままあった。特に、四年制大学への進学も視野にいていたPさんにとっては、学校の授業内容だけでは学力不安を感じ、2年次からは予備校へも通った。高校卒業後に進学を希望する同級生は、専門学校も含めて80～90%占めていたが、高校側は、大学への進学希望者に対しては、公募制推薦方式やAO入試方式を利用したの進学を勧めた。そのため、一般入試での受験を考えていたPさんにとっては、受験指導の方法については、多少の不満が残ったという。

ただし、高校生活全般においては、教員たちは、みな大変に相談し易い人たちばかりであったという。生徒の相談に乗るための知識や技術を持っている教員が多く、聞いたところによれば、全ての教員たちが心理学等のなんらかの専門的な資格を持っていたという。

高校生活全般を振り返ると、不登校であった自分が学校に通えるようになって

たことが大変に嬉しく、また学校に通ったことによって友達もでき、また高卒の学歴を得たのみならず、自らの人生の選択肢が広がったと強く感じる事ができたという。何事も今の自分があるのは、出身校である通信制高校のお陰だと実にありがたく思っていると語った。

### (3) 事例2 (男性Qさん)

#### <大学への入学動機>

Qさんは、高校3年生の夏休みくらいから、卒業後に進学を進むことを考え始め、専門学校や四年制大学のオープンキャンパス等にも参加した。しかしながら、四年制大学のいくつかのオープンキャンパスに参加したものの、具体的な入学したい学部名が決まらず、実際にどのようなことを学ぶのかのイメージがわからなかったため、入学後に自分の学びたい分野を決めることができる仕組みをもつA大学の受験を決めた。Qさん自身は、演劇に興味があり、当初、四年制大学への進学よりも、演劇分野の専門学校への進学を希望していたが、高校の教員たちからも四年制大学への進学を勧められたことにより、四年制大学への進学を考えるようになったという。また、中学時代から不登校であったが、塾には通い続けており、その塾の先生からも、四年制大学への進学を勧められたという。ちなみに、保護者からは、専門学校か四年制大学のどちらかを特に勧められたことはなかったという。A大学入学後は、文化祭実行委員として課外活動も行なうなど、積極的に日々を送っている。

高校時代から演劇の同好会に積極的に関わり、文化祭実行委員なども経験した。高校時代にそうした経験があったからゆえに、大学生活でも積極的にサークルや文化祭実行委員などの課外活動にも参加する意欲がわいたという。その意味で、高校生活は自らの糧になっていると感じている。

#### <通信制高校への入学の背景>

中学時代に不登校だったこともあり、不登校経験者を積極的に受け入れることを教育理念とした通信制の高校への入学を考えたという。複数の不登校経験者を積極的に受け入れる高校に訪問した結果、教員と生徒の距離が近い雰囲気を感じ、アットホームな印象を受けたことから、出身校への入学を決めた。学ぶ場所は、技能連携校を選んだが、特にQさんがそれにこだわったわけではな

く、高等学校側からの勧めによってそのような形になった。

<通信制高校の学習方法とその内容>

1週間は、週に4日間（月火木金）は朝9時半から午後4時くらいまで時間割が組まれているいわゆる通学型の授業形態をとっていた。ただし、週に1日、水曜日は、各生徒による「自主企画日」となっており、学校に行き同好会活動にあててもよいし、教室にて自習してもよいし、ただ学校に友達に会いに行くでもよいし、学校に行かずとも在宅してもよいとされている日であった。ただし学校側には、どういった時間を過ごすか、計画表のようなものを作成し、前日までに記入し、教員を通じて提出することが求められていた。水曜日が終了したら、その結果をまた記入し、再度教員に提出をし、それをもって「出席」として扱われたという。

高校の1クラスの規模は、全員出席すれば25名ほどであったが、朝のホームルーム時には3～4名ほどであることもしばしばであった。大体、日々教室に居る人数は、15～16名ほどであった。教科の授業においては、教科ごとに1学年を学力別に3クラスに分けていた。中学時代の学習内容がほぼ理解できている生徒用のクラス、それにまだ少し満たない生徒用のクラス、まったくわからない生徒用クラスとなっていた。高校入学前に、数学、国語、英語については、プレースメントテストがあり、その結果によってクラス編成がなされていたように思うと、Qさんは話した。ただし、学力別のクラス編成とは言うものの、やはり同一クラス内においても、学力差はあったという。授業は一斉授業が原則であったものの、堅苦しい雰囲気ではなく、学習内容がわからない生徒がいた場合には、その生徒に合わせて個人的に先生が指導する場面も多かった。他方で、理解できてしまっている生徒にとっては、手持ち無沙汰になることもしばしばあったという。

Qさんの場合は、英語が中学時代から好きで得意だったため、高校での英語の授業では、復習のようなになることが多く、もう少し高いレベルの内容を教えてほしいと思うこともあった。しかしながら、先に触れた「水曜日」に「自習」を企画し、教員に個別の補習を願い出ることができたため、そうした時間を活用して自らが学びたいことを教員から習うことができたという。

レポート課題は、自宅学習用に特化したような別立ての教材は特になかった

という。あくまでも学校の授業において、学習内容が提示され、宿題等も特に行なった記憶はないという。定期テストだけはあったので、試験勉強はある程度は行なったという。ただ、Qさんの学力的には余裕のある学習生活だったため、学力に対するコンプレックスのようなものは、少なからず持っていたという。それゆえに、大学進学ということを考えだすようになった頃には、入学するための学力、知識力よりも、入試形態（公募制推薦やAO入試）に着目するようになり、教科学習に力をいれるよりは、推薦入試等の対策のために、読書感想文や自己PRの方法などについて学ぶことが多くなったという。進路指導担当の専門の担当教員が配置されているわけではなかったが、いずれの教員からでもそうした入試対策のような指導は受けることが可能であった。高校の教員たちは、入試の面接の対策指導も積極的に行ったという。

教員と生徒の距離はきわめて近く、先生たちが生徒に積極的に話しかけることが多く、自ずと両者の距離間は近くなっていったという。Qさんは、不登校経験者が多い高校だったため、先生たちは、学校という場所が楽しくなるように、楽しく通えるように、きめ細やかな配慮をしており、言葉のかけかたや対応の仕方に表れていたと考えている。Qさん自身は、入学後しばらくしても朝が弱い習慣は続いてしまい、授業への遅刻は多かったという。ただし、放課後に活動する文化祭の実行委員会や演劇同好会へは積極的に参加をしたという。

Qさんは、中学のときに不登校であったにも関わらず、学校に行かれる、通えるようになったことだけでも、高校生活は十分な価値のあるものであったと思えるとインタビューを締めくくった。

#### （４）事例３（男性Rさん）

##### ＜大学への入学動機＞

高校３年生のとき、Rさん自身は大学への進学は特には考えておらず、当初は美容系の専門学校に興味を持っていた。しかし、専門学校の説明会などに出かける中で、少し自分の想像していたものとは異なる気がしたので、改めて担任教師に相談したところ、担任教員がRさんの当時の学力で進学できそうな大学をリストにして提示してくれたという。その中に、A大学が入っており、Rさんの家族でA大学関連の高校に通っていた人もいたため、A大学に縁を感じ

るようになったという。また、高校2年あるいは3年次に、アメリカ人の青年を招聘したイベントプログラムが実施され、Rさんの自宅に彼らを数日宿泊させた経験があった。これがきっかけとなり、外国人と接してみたい、という気持ちも芽生え始めていた。A大学には留学プログラムがあったため、そのプログラムへの興味も感じるようにもなった。特に特定の学問分野への興味はなかったため、入学してからやりたいことを見つけられると思い、A大学に入学した。大学入学後は、留学も果たし、さらに留学後からは、特にアジア地域への興味が高まっているという。文化人類学の研究会にも参加しようと考えているという。

大学への入試形態は、公募制推薦であった。高校のクラスメイトたちも推薦制度を視野に入れて大学を探して進学する傾向があったという。高校側も、そうした入試方法の対策にはかなり力をいれてサポートがあった。小論文や読書感想文などに対しては国語の教員から繰り返し丁寧な指導があったという。

#### <通信制高校への入学の背景>

Rさんは、中学時代に引きこもり状態であったため、外界との接点がなかった。高校への進学さえも考えていなかったと言う。ただ、友人の1人が定時制高校に進学を考えており、Rさんも一緒に入学しないかとの誘いを受けた。しかしRさんは定時制高校の雰囲気になじめるかの不安が隠しきれず、Rさんの保護者はそれを汲み取り、サポート校数校にRさんを連れて行くなかで入学先が決まったという。

#### <通信制高校の学習方法とその内容>

朝9時から午後3時くらいまで時間割が組まれていた。クラスは20名から30名くらいで編成されていた、英語や数学は学力別クラス編成をとっていた。しかしながら不登校経験者を多く受け入れているサポート校であり、学校に通ってくる生徒は大変少なく、クラスによっては出席しているのは、2、3名ということもあったという。したがって、授業形態は一斉授業でありながらも、実際には、個別指導の方法で授業が進められることも多かったという。

総じて、生徒一人ひとりの状況を見ながら、教師たちはきめ細かな対応をしていた。さまざまな事情を抱える生徒が在籍していたため、教員たちは授業だけでなく、生活指導等に対してもほぼマンツーマンのような形で生徒たち一人

ひとりと関わっていたという。教員たちは、学校に出て来ることが難しい生徒たちには、出席するように無理に促すことはなく、頃合を見計らいながら、電話をかけたり、臨機応変に対応していたという。Rさん自身の経験からも、学校に顔を出せない日が続くと、先生は電話をしてくるだけでなく、自分の自宅に遊びに来ないか、といった誘いもくれたという、今になって振り返れば教員たちの負担は大変に大きかったと思うと振り返る。新年度が始まるとみるみるうちに痩せていき、辞職する教員も多かったと記憶している。若い教員が多かったのが印象的であったという。

Rさんは、入学当初は他の生徒たちに会うことに抵抗があり、3時まで行われている授業が終了したころに、学校に出向き、教員からレポート課題を受け取っていた。受け取ったものをその後、教室にて取り組むこともあったが、家に持って帰り、自宅で取り組むことが多かった。学校に行かない場合には、レポート課題は家に学校から郵送で届けられた。レポート課題の提出期限は決まっているものの、学校側はかなり柔軟に対応していたという、1年次に提出すべき課題を3年次で取り組み、提出している生徒もおり、教師たちは、「卒業までにはやろうね」と声をかけながら、一人ひとりの様子を見ながら取り組みをサポートしていたという。

レポート課題内容は、全教科が対象で問題集のような形になっていた。Rさんは中学時代に習った気がするような内容であったと振り返る。レポート課題を行なうための教科書のような教材もあったという。レポート課題でわからない箇所は、教員に聞けば教えてくれることになっていたのはわかっていたが、先生は絶え間なく忙しそうであったし、何より、自分の変なプライドのようなものがあり、わからないということ自体に妙な抵抗感があり、なかなか質問をすることができず、空欄で提出することもあったという。レポートは必ず、採点されて生徒に返却された。添削者によっては、解説等も書き添えてあったという。

定期試験もあり、必ず35点以上を取り、合格（パス）をすることが必要であった。試験で赤点（35点以下）になってしまうと、補講の時間が用意され、その場（教室）で勉強しては、手を上げ、先生から再度試験問題を受け取り、試験問題に取り組む、そして、その場ですぐに採点をしてもらう、という行為を

35 点以上になるまで繰り返し行なう必要があった。ただし、生徒によってはかなり教員側は柔軟に対応している場合もあり、試験の最中にも質問等もして良ことになっていたと R さんは指摘する。

教科の成績は、レポート提出さえしていれば、5 段階評価中 4 の評価をもらえるほど、ある意味良い成績を取ることは難しいことではなかった。それゆえに、学力不安というものを常に抱えることになった。学校は 3 時までの授業が設定されていたが、それ以降に、自由に学ぶ時間などが提供されていたらよかったのではないかと R さんは指摘する。一斉授業や、決まった学習内容を提供するだけでなく、生徒一人ひとりの希望に沿った学習サポートのような時間があると、そうした時間に発展的な学びや自分がわからないところを中心とした学びができたのではないかと思うと語った。しかしながら、それでも学費が高く設定されていた学校であり、そうしたことをやるためには、さらにコストもかかるので難しいのだろうとも述べた。

しかしながら、R さんにとって、学力不安という要素は大変に大きいことがインタビューからは感じた。大学入学も推薦制度を利用したために、自分の学力を客観的に試す場がなかったまま今日に至り、未だに学力に対しては大きな不安があると言う。大学入学後に、旅先にて出会った人物に、推薦制度を利用して入学したことについて批判を受けたこともかなり影響しているようであった。ただし、最近になって文化人類学という分野にも強く興味を持ち始め、自らでも積極的に勉強し、研究会にも参加しようと考えているようになったことなどからも、入学当初のような学力不安は感じなくなっているという。

高校全体を振り返ってみると、やはりセーフティーネットであったと改めて感じている。自分を支えてくれた存在であり、高校の卒業資格を取得し、大学にも入学を果たした。また、高校時代には、課外活動であるサッカー部との出会いによって、ひきこもりであった自分に友人もできた。自分で働きかけることで何かを得られることを高校生活は教えてくれた。自分が何かを得ることによって、また新しい出会いやチャンスが広がるということを自分に教えてくれた存在が高校生活であったという。

#### (5) まとめにかえて

繰り返しになるが、ここでのインタビュー対象者は、広域性の私立通学型の通信制高校であり、また同じ私立四年制大学に在籍している者たちである。極めて限定された対象者である。しかしながら、いずれもが高校生活によって自らの今日があると、その存在に感謝している。大学進学の可能性、自らの将来の可能性など思えずに苦しんだ時期もあった者たちが、通信制高校との出会い、存在によってその道が拓かれていった。学習機会拡大の可能性としての通信制高校のあり方は、制度上の発足当時からのものであるが、そこで学ぶ者たち自身、またそのニーズの変化は明確である。彼ら自身の声から何が必要かをさらに知り、整理することが第一の課題である。



## 第5節 障害のある生徒への対応と制度・施策・実践をめぐる課題

### 5-1 はじめに

「学ぶ意欲のある有職青少年」を対象とする学びの場としての役割を担ってきた通信制高校は、今日、とくに生徒の実態において大きく様変わりし、その理念、目的、教育内容、方法等に関する再検討を迫られている。また実態にあった学校運営等を行うための条件整備も求められている。

生徒の実態の変化の重要な中身は、不登校の経験を有する生徒、および障害のある生徒の入学・在学者数が増大していることである。しかし特に障害のある生徒の増加に関しては、これを裏付ける全国的な悉皆調査もしくは抽出調査による実証的データが見当たらない。また、われわれの今回の調査研究でも、全体の調査の一部に位置づけて、障害のある生徒にかかわることのごく一部分について把握を試みるにとどまった。そのため厳密を期すれば上に述べたことは推定であると言うべきであるが、その確度は相当に高いと言ってよいであろうと思う。今回の調査結果においても、すでに記述されているが、たとえば「設問2 通信制高校の抱える課題について」は、とくに高校側の回答では「発達障害・学習障害をもつ生徒への個別指導」が「基礎的な学力の定着」に続いて第2位になっており、制度や施策、実践にかかわる大きな改善の必要性が浮かび上がっている。ここでは次の3点について扱う。

(1) 障害のある生徒の後期中等教育に関する経緯をすこし振り返りつつ、学校基本調査等を参照して数値的な整理と若干の検討を行う。(2) 障害のある生徒の学習を中心とした学校生活にかかわる困難と必要な対応について問題の整理を行う。(3) これらの生徒の学習支援を強化するために必要と思われる制度、施策、実践等にかかわる今後の課題についていくらかの指摘を試みる。

## 5-2 通信制高校における障害のある生徒の増大と通信制高校

### 1) 後期中等教育への進学者数の大幅増

養護学校教育義務制が施行されたのは1979（昭和54）年度であった。この前後から10年余の間に、子どもや親の特殊教育諸学校の高等部（当時の呼称。盲学校、聾学校、養護学校〈精神薄弱、肢体不自由、病弱をそれぞれ対象とする3種があった〉）への進学要求が高まった。当時すでに盲学校高等部、聾学校高等部への進学率は健常児のそれをしのぐ数値を示していたので、後期中等教育への進学者数の大幅増とは、すなわち知的障害、肢体不自由、病・虚弱の生徒の場合についてのことである。養護学校中学部の保護者や教師は、生徒のおもな進路先として養護学校高等部を想定し、高等部設置を要求して国や自治体に働きかけた。中学校特殊学級の卒業生についても、学校教育法上は高校にも特殊学級が設置できるとなっているが現実には未設置であり、後期中等教育の場が限られていた。そのため卒業生の一部は全日制および定時制の高校への進学を試みたが、同時に養護学校高等部に進路を求める者も少なくなかった。こうして養護学校高等部を設置してほしいという要求は全国的に広がり運動となった。このような動きも背景にあり、知的障害、肢体不自由、病・虚弱の生徒の後期中等教育の制度的整備は90年代のわが国の障害児教育の制度をめぐる一つの焦点となっていた。

#### <養護学校高等部>

しかし、障害のある子どもの後期中等教育にかかわる制度的検討は特にはなされず、養護学校高等部の新增設は必ずしも順調に進まなかった。結果として全国各地の高等部の生徒数は大幅に増加した。全国各地の養護学校は、小学部・中学部・高等部と進むにしたがって在学者数が増えるという傾向を強め、いわゆる逆ピラミッド型と言われる現象が目立つようになった。具体的に最近のデータを見ると、たとえば平成19年度においては中学部26,044人、高等部50,369人となっており、後者が2倍弱となっている。

高等部には、中学部からの進学者の大多数、中学校の特別支援学級に在籍した者、通常学級に在籍し通級による指導のための教室を利用した者、もっぱら通常学級に在籍して学習していた者が入学してくる。

90年代にすでに養護学校の現場から「知能指数が100を超える生徒が入学してきている」という声が聞かれた。あわせて特に中学校の通常学級に在籍していた生徒の多くがいじめにあった経験をもち、心の荒れが目立ち、自己肯定感をもてない状態にあった。そのために、高等部の1年ないし2年の間は、まず心の傷を癒す課題が大きく、この課題への取り組みを経てようやく通常の意味での「学習」にはいる条件ができるのだという発言がひんぱんになされた。これは軽度の知的障害とともに、高機能自閉症、アスペルガー症候群、LD、ADHDなど、のちに特別支援教育の対象となる知的障害を伴わない障害児が、すでに少なからず養護学校高等部に入学していたことを示唆するものである。

#### <通級指導教室>

1993年度から小中学校に通級による指導のための教室(いわゆる通級指導教室)が設置されるようになった。これは2005(平成17)年度までは言語障害、情緒障害、弱視、難聴の障害のある児童生徒で、通常学級の学習におおむね参加できる程度の者を対象として補習的学習や障害への対応を行う「教室」(学級ではない)であったが、06(平成18)年度以降は自閉症、LD、ADHDの児童生徒もその対象に組み入れられた。

通級による指導を受けている児童生徒数は、文科省『特別支援教育資料(平成19年度)』によると小学校46,956人、中学校2,729人で、後者がきわめて少ない。これはもっぱら中学校における通級指導教室の設置数が少ないためである。では小学校の通級指導教室の利用者は中学校ではどこに行った(行く)のか。中学校の自閉症・情緒障害を対象とする特別支援学級(平成21年2月3日付初中局長通知により、それまでの「情緒障害」特別支援学級の名称は「自閉症・情緒障害」と改称した)の生徒数は11,570人で、小学校の同種の学級に在籍者の3分の1近くを占める。そしてその他の生徒は通常学級に入級すると

推量され、正確なところは分からないが、補習的学習や障害への対応はないままに過ごす生徒数が多かったことを示唆している。

こうして自閉症、LD、ADHD の生徒は養護学校高等部に入学するか、通常の高校の全日制、定時制、あるいは通信制に進路を求めたと思われる。同時に指摘しておく必要がるのは、軽度の知的障害のある生徒もまた、先にのべたように中学校までは設置されている特殊学級が高校に設置されていないことも手伝って、上述の自閉症等の生徒と同様の進路を求めたということである。

#### <特別支援教育への移行>

2007（平成 19）年度、わが国の障害児の教育は、それまでの特殊教育から特別支援教育に移行した。以下に特別支援教育の特徴を 2 点のみあげておく。

第 1 は、特別支援教育の対象となる障害種が拡大されたことである。

この教育の対象に LD、ADHD、高機能自閉症など知的障害を伴わない障害が組み入れられたのである。これらの障害のある児童・生徒は、特殊教育諸学校や特殊学級で学ぶ必要はないと見られ、その多くが小・中学校の通常学級に在籍していた。またその一部は前述の通級指導教室を併用していた。

なおこれらの障害児が公立小中学校の通常学級にどのくらい在籍しているかを把握するために文科省が 2002 年 2、3 月に実施した調査（学級担任を含む複数の教員の判断によるもので、医師の診断によるものではない）では、約 68 万人（6.3%）であろうとの推定値が得られている。

第 2 は、幼稚園から高校までの各学校で障害のある子どもが学んでいる場合、そのすべてにおいて特別支援教育を実施するとしたことである。

以上の養護学校高等部、通級指導教室、特別支援教育への移行に関する記述には重複も見られる。だが特別支援教育に移行した現在でも、知的障害、肢体不自由、病弱の生徒をそれぞれ主たる対象とする特別支援学校の在学児童生徒数を見ると、逆ピラミッド型の事実に変化はない。それと同時に、数値は把握されていないが、全日制高校、定時制高校、通信制高校にも相当数の障害児が在籍していると見られる。

LD、ADHD、高機能自閉症などいわゆる「発達障害」——これは必ずしも国際的レベルで共通用語となっているわけではない。知的障害その他多数の障害にも発達上の障害が認められ、「発達障害」という言葉を使う場合にはそれらも含めて考える必要があるからである——が数的に増加しているのではないかとされている。この点については種々の角度から専門的な検討がなされるべきであるが、多くの専門家が「発達障害」が発生数において増加しているという認識を共有していると思われる。

## 2) 不登校と障害

通信制高校に入学してくる生徒には不登校経験者が少なくない。進学校を含む一般の高校に入学して不登校となった生徒、不登校にはならなかったが学習や人間関係にかかわる困難があり、通信制高校に進路変更した生徒もいるであろう。不登校の要因の1つに障害がある。しかし通信制高校が入手しているデータには、義務教育段階で障害ゆえに学習についていけなくなり登校意欲を失った生徒、あるいは障害ゆえにいじめにあつて不登校状態になった生徒に関しては、不登校の記載はあっても、必ずしも障害については記されていない者もいるであろう。また通信制に入学後も、障害に関する正規の診断は行われていない場合もある。

さらに軽度の知的障害があるが、養護学校高等部は進路とせず、全日制、定時制高校に入学し、進路変更によって通信制高校に入学してくる者もいるであろう。この傾向は、特別支援教育において通常の学校・学級でも障害のある生徒がいるならばこの教育の対象とするということが打ち出されたことも影響して、今後もっと強くなる可能性もある。

以上、要するに不登校経験者と障害のある生徒の間には、一部分で重なりがあると見てよいかもしれず、そのような場合には不登校経験者としてのみ教育的に対応しているのでは不十分になってしまう可能性がある。

### 5-3 障害のある生徒の学習を中心とした学校生活にかかわる困難について

本項では LD、ADHD、高機能自閉症など知的障害を伴わない障害のある生徒に対する教育的配慮のために必要となることらについて、ごく大まかに、そしてそれらはたがいに重なり合うところがあるが、いくつか問題を取りあげておきたい。

1) 同じ障害のカテゴリーに属する障害であっても、それらの間に大小さまざまな差異がある。

たとえば同じく自閉症という大枠でくくれる場合であっても（診断学的には『自閉症スペクトラム』というカテゴリーを使うことがある）、その状態像はきわめて多彩である。知的障害を伴う場合もあり知的障害のない場合もある（後者がいわゆる高機能自閉症である）。知的障害がない例の中にはアスペルガー症候群という診断が下されている場合もあり、これは高機能自閉症とは趣をやや異にしており、特に言語発達における遅れや偏りが見られない。教育その他の対応に当たっては、このような障害の内部での差異を無視してかかることはできない。

2) 能力発達（あるいはその障害の態様）や行動上の特徴に個人差が大きい。

たとえば LD と診断されている例でも、読字障害・書字障害が顕著な例があるかと思えば、計算障害が顕著である場合もある。また運動機能面でのいわゆる不器用が目立つ例もある。ADHD と診断されている場合でも、注意の障害が顕著な例、多動性が顕著な例、これらの両方が認められるとともに衝動性も無視できない例もある。

3) 学力水準は障害の程度に 1 対 1 対応するとは限らない。

障害の種類や程度は変わらなくても、各生徒が身につけている学力には種々の程度で差異がある。言うまでもないが、障害も絡んだ不登校経験があるか、特別支援学級または通常学級での学習におけるサポートはどうであったか、情緒的な問題をともなっていたということはないか、その他学習履歴上のさまざまな要因が絡んで現在の学力の状態になっている。指導に当たっては個々の生徒の学力水準、各教科の系統の中の、どこで学習の「つまづき」があるかを把握して配慮することが必要である。

4) 自己肯定感、自己効力感の育ちそびれがある例も少なくない。

これらの障害を伴う生徒は、早い場合には乳幼児期から、「叱られてばかり」で「ほめられる」という経験が少ない傾向がある。これは反抗的で言いつけを守らないとか意図的に学習を怠けるということの結果ではない。本人はまじめに努力するがそれが成果に結びつかないということが多いためであり、「叱られる」経験の蓄積によって学習意欲を減退するだけでなく、「自分はダメな存在だ（自己肯定感の低下）」「がんばってもうまくいきそうにない（自己効力感の弱さ）」と考えてしまう傾向を強める。このような傾向に配慮し、スモールステップで学習指導を行い、「やればできる」といった感覚をつかませること、小さなことでもそれを取り上げてほめるといった働きかけを根気強く積み上げなければならない。いわば「学習に向かう準備態勢を整える」ことがだいじなのである。

5) 対人関係、社会性にかかわる指導が必要である。

4) に述べたこととも関連するが、これらの生徒たちは概して対人関係を結ぶことが不得意であり、また社会生活を送る上で必要なスキルが身につけていないことも少なくない。たとえば自閉症のある生徒の場合、「相手がどう感じ、どう考えているか」を推論することができないことが多い。そのため相手と話

が食い違ったり、一方的に話しかけたり、相手がいやがる内容のことをひんばんに言うなどということになることもある。

学習支援とともにこれらの面にも目配りをするのが大切である。

#### 5-4 制度・施策・実践をめぐる今後の課題

以上のように、今日の通信制高校には現実に少なからぬ障害のある生徒が学んでいると推定でき、学習をはじめ学校生活にかかわる種々のニーズがある。しかし、そうしたニーズに応える教育を通信制高校において実施することには多くの困難が伴うであろう。いずれも即座に実現可能とは思われない課題ばかりであろうが、以下にいくつかの課題を挙げておくこととしたい。

##### 1) 通信制高校の目的・目標に関する見直し。

障害のある生徒の後期中等教育のあり方については、ひとり通信制高校のみに検討を迫るのは適当ではない。幼・小・中・高・大という教育機関のすべてにおいて、特に障害のない児童・生徒・学生のなかで障害のある児童・生徒・学生の教育を進めるために制度・施策上の改善・改革をどうすすめるかがもっと徹底して検討されなければならない。通信制高校の改善・改革はその一環である。

このことを前提に言えば、「学ぶ意欲のある有職青少年」を対象とする学びの場としての通信制高校は、そのミッションについての見直しが必要な段階にきていると言えるかもしれない。言うまでもなくこの見直しの課題は、現場において取り組んでいる実践者に対しても向けられている。これはおそらく即座には結論に至らない難問であると思われる。だが、少なくとも議論を開始することが必要である。



## 2) 教職員の配置について

通信制高校は設置主体、設置形態、学校運営に多様性があることから一律には論じられないが、知的障害や「発達障害」の生徒の指導は、個別指導と集団指導を適切に組み合わせる必要がある。このことに留意した教職員の配置が必要がある。

## 3) 専門職者との連携強化

養護教諭の配置はもちろんであるが、障害や発達に関する専門家、臨床心理士・学校心理士・臨床発達心理士等々の専門職者との連携もぜひとも必要である。各学校現場において、いわゆるケース・カンファランス等が適宜実施されるならば、それは教育活動の改善のために相当な効力を発揮するであろう。これらの専門職者を正規職員として配置するのは少なくとも当面は難しいと思われるので、身分上のことは個別に検討されなければならないが、可能などころから連携の努力を重ねていくことが望まれる。

## 4) 個別指導

障害のある生徒の指導は、通常の場合よりもはるかに濃密な生徒－教師関係をつくりつつ、個別指導を進めなければならない。5－3に述べたような障害のある生徒の障害の特質や各人の個別的特徴にできるだけ目配りをした学習指導——それは教材の開発・選択や教授法の工夫も含む——がなければ、生徒たちは有効な学習を進めるのがむずかしい。究極的には教育課程編成の弾力化、単位制についての再検討等も課題になる可能性がある。

しかし同時に、スクーリングを増やし、他の生徒と交わる機会をつくるといった措置をとることを通して、対人関係や社会性を育てる課題に可能な範囲で対応するなどのことができるならばいっそうよい。

## 5-5 おわりに

障害のある生徒の在学者数（率）の増加は、従来の通信制高校に新たな課題が1つ付け加わったというにとどまらなないと考えるべきであろう。それゆえ第三者評価の課題や方法も、通信制高校のあり方に関する検討と改革がどう進むかということとかかわって積極的に検討され、その後も随時見直していくことが求められる。そのことを前提に、いくつかの課題を挙げる。

第一は、各校における、また全国的なレベルでの、障害のある生徒の在学者数（率）の把握につとめることである。これ自体、本来ならば医師その他の専門職者の協力なしには不可能なはずである。だが、さしあたりは、先にふれておいた文科省の2002年2、3月の調査のように、学級担任を含む複数の教員の判断によって推定値でもよいから把握する必要がある。もちろんその際には、LD、ADHD、高機能自閉症など知的障害を伴わない障害のある生徒だけではなく、知的障害その他の障害のある生徒をも視野に入れておかなければならない。

第二は、各校における障害のある生徒への対応について調査研究を行う必要があるだろう。おそらく多くの教職員が障害のある生徒への対応に奮闘し、創意工夫をこらし、成果をあげているにちがいない。しかし他方では、どのように対処すべきかわからず苦慮している場合もあろう。これらの取り組みの実態が俯瞰できるような調査研究が行われ、その結果が共有されていくようにすべきである。第三者評価における評価の観点や方法を作成・改善していくには、このような実践事例をできるだけ広く十分に収集し、それらを参照する必要があると思われる。

第三には、たとえば学校と教育委員会との間の認識のずれが今回の調査でも認められたが、障害のある生徒への教育にかかわって、関係機関、関係者の間の情報の共有を手始めに、共同して改善策を練る努力を進めることが望ましい。この点での取り組みが進捗すれば、通信制高校における第三者評価のあり方の

検討もさらに進み、その質の向上に役立っていくであろう。

以上の3点は、いずれも言うのは簡単であるが実行するには困難が伴う。だが、こうした基礎的な作業が不十分なままでは、障害のある生徒に対する学習その他の支援を視野に納めた第三者評価の妥当性を担保することは困難となるろう。

